

平成 27 年 6 月 1 日

京口門だより No. 20

いよいよ梅雨の季節となりました。田んぼには植えつけられた稲の苗が風にゆれる景色が見られる時期です。湿度の高い季節は神経痛や関節痛に悩まされる時でもあります。漢方では風・湿・寒の三つの要因が痛みを起こしてくると考えています。湿度の高いこの季節は影響が大きいと言えます。神経痛や関節痛といってもその原因や部位によって対処の仕方も変わってきます。

このような痛みの病気にはしばしば鍼やお灸がよく用いられます。鍼といえは痛いのではないかとか、お灸は熱くて跡が残るから嫌だとか、先入観をもつてとらえられることが多いのですが、鍼治療にしても灸治療も何千年の歴史をもった治療法です。決して安っぽい民間療法とはべつものです。身体を精密に調べて、経穴(ツボ)や経絡(ツボのある流れ)という病気の反応場所と同時に治療部位となる所を見出して、どのような病気であるかを診断し、それに従って治療法を決めていくものです。よく圧痛のあるところがツボで、そこに鍼をしたり灸をすればよいと思いがちですが、そのような簡単なことではありません。特に鍼をするときは、このような症状や病気があれば、どの経絡やどの経穴を用いるかを選ぶことは重要なことで、それを誤ると効果がないどころか、良くない反応を起こすこともあります。治療に際しつぼに鍼を刺すときでも、どのように刺すかで反応が正反対になることもあります。たいへん注意深く行わなければなりません。

ただお灸の場合は一定のツボを選んで、そこに継続してお灸をし続けることになり、あまり細かな注意はいりませんから、患者さんご自身でも行うことができます。しかし、どのようなツボを選ぶかは、最初の重要な作業です。ただ痛いところにすれば良いとはかぎりません。不適切な所に灸をしても効果はありません。

鍼と灸の違いは何かとよく尋ねられますが、簡単に言えば鍼は即効性があるが持続性が短い、灸は即効性のある場合もありますが、長くじわじわと効果が出てくる傾向があります。鍼は自分ではできませんが、お灸は自分でもできます。

先日も手首の腱鞘炎がお灸ですっかり治った方がおられました。変形性膝関節症で膝の腫れ痛みがすっかり治る方もおられます。腰痛症、五十肩なども効果があります。

